

「戦争と平和！」 第 20 回

パラオと沖縄で

松崎 晁

明治 44 年（1911 年）生まれの母は東京に嫁いでいた姉を頼り昭和 2 年上京し、看護学校を修了して港区の病院に勤めていた。昭和 10 年頃の秋に空巢に入られ、冬物をゴッゾリ持って行かれた。当時委任統治地であった南洋パラオの中心地ロコールの病院が看護婦を募集している事を知り、「一年中夏物ですごせる」と渡った。渡る前に助産婦の資格を得ていてパラオで数人を取り上げ、その内の一人は酋長の子供で、酋長の妻と子供と母の三人が写った写真があった。マンゴスチンは美味しかったが、パパイヤは好きではなかったなど時折当時の話を聞かせてくれた。南洋庁の職員であった父と結婚し、昭和 16 年 3 月姉が生まれたが健康状態が思わしくなく、南洋では十分な診察が受けられないと入ってきた連絡船に飛び乗った。昭和 16 年 12 月 8 日開戦の日、船はパラオから横浜に向けて小笠原沖を航行していて開戦の報を聞いたという。開戦直後で攻撃を受ける事も無く、無事横浜港に到着した。戦火が激しくなってきた父も一年後位に内地引き上げとなったが、途中船団が潜水艦の攻撃を受けて他の輸送船が沈没。護衛の駆逐艦が爆雷を投下したが反対に魚雷攻撃を受け、海面に向かって大砲を撃ちながら沈んでいったと話していた。帝国海軍の潜水艦探知能力は相当低かったようで、中学生の時読んだ駆逐艦「五月雨」の水兵の日記には、「艦長は潜水艦を恐れている」と書かれていた。聯合艦隊の根拠地だったサイパンとは違いパラオでの地上戦は無く、母が 80 歳を過ぎて観光で訪れた際、勤めていた病院が事務所として使われていたという。両親のいずれかが引き上げる途中で船と共に沈んでいたり、パラオに残っていた父が空襲で死んでいたりしたら、昭和 19 年生まれの私は存在していない。



平和祈念公園 平和の礎の中央通路

話はガラッと変わるが、2 月に初めて沖縄に行ってきた。最後の激戦地である摩文仁の丘の平和祈念公園と、ひめゆり

祈念資料館を訪ねた。

平和の礎ではズラッと同姓が並び、一家で何人もが犠牲になったのかと胸が痛む。名前が判らず「〇〇の妻」との記述もあり、家族、親戚、近所の方など大勢が犠牲になり、名前を特定出来ない惨状を思わせる。平和祈念資料館には様々な展示があったが、本土決戦の準備時間稼ぎの長期戦の方針により、女性や子供まで根こそぎ動員し、食料の徴発による住民の飢餓が起きた事が記されている。追い詰められた軍は配備等を漏らさぬため集団自決を強いた事などの説明があり、国民を守るのが軍隊という定義では到底理解出来ない行動をとっている。



筆者平和祈念公園にて

平和祈念公園の後訪ねたひめゆり祈念資料館の前にはひめゆり学徒隊最期の鍾乳洞があり、覗くとほぼ垂直に数メートル下がっている。この様な場所で学徒隊

は突如軍から解散を通告され、弾が飛び交う地上に出る事もできず、どう行動したら良いのか迷っていたという。米軍から出てくるよう言われたが出られずにいると、毒ガス弾を投げ込まれ殆どが亡くなった。致死性の毒ガスの使用は戦時国際法違反ではないのか。この毒ガス使用や、焼夷弾により 10 万人が犠牲となった 3 月 10 日の大空襲、あるいは原爆の投下は「勝てば官軍」も構わないという戦争の醜い姿を示している。

沖縄戦では戦死した軍人の何倍もの民間人の犠牲者があり、中央通路の左側は民間人、右側は軍人になっている平和の礎を見れば実感できる。昭和 16 年から始まった戦争でも同じであった。正義のため、平和のため、国の利益を守るため、あるいは国際秩序を守るための戦争と理由を付けるが、在るのは破壊や殺し合いだけ。絶対戦争はしてはならないと沖縄で強く感じた。